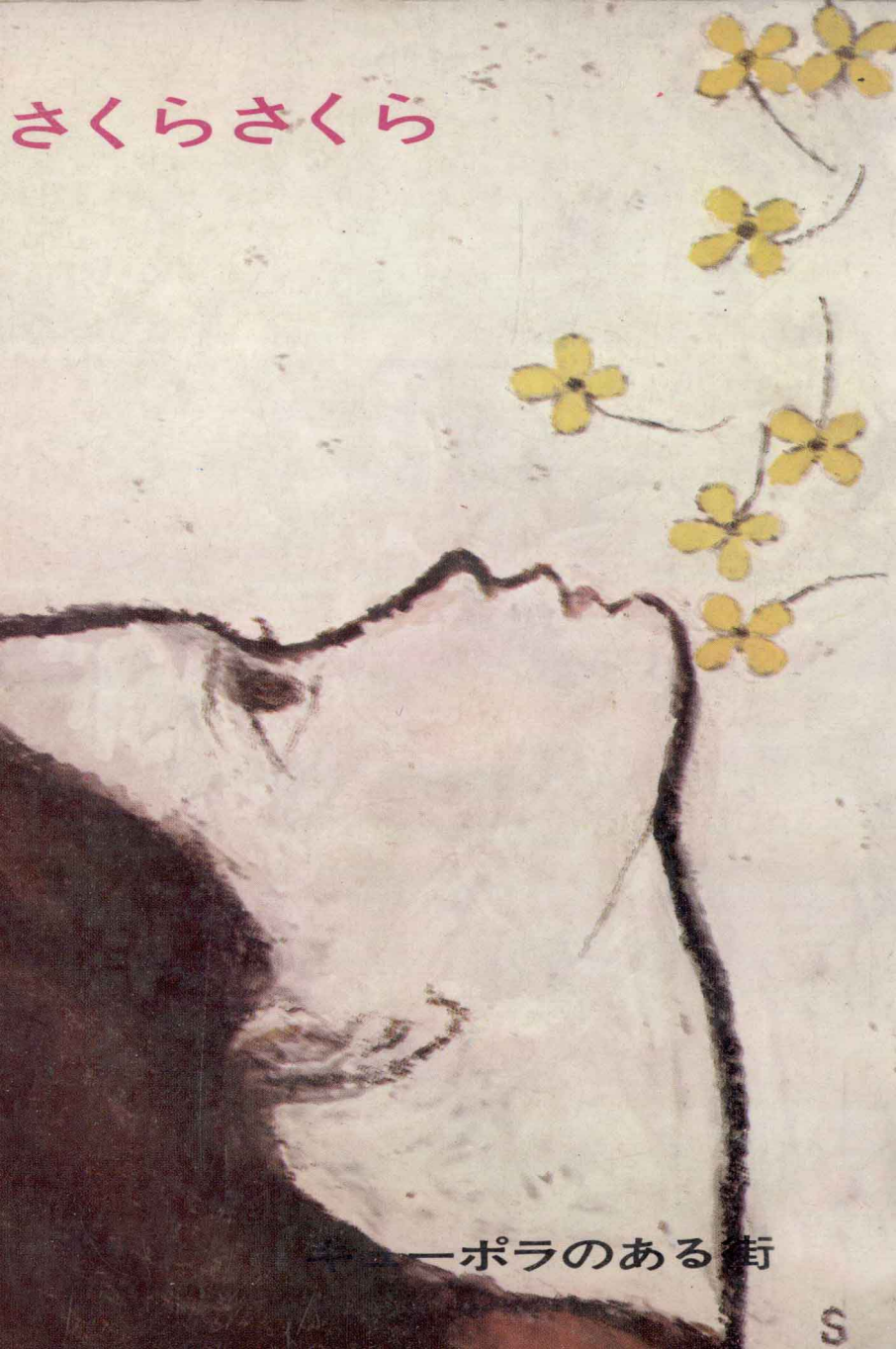


さくらさくら



ポーラのある街

キューポラのある街／第4部

くらさくら

早船ちよ



理論社刊



キューボラのある街 (4)
さくらさくら

© 1970 年 3 月 第 1 刷

定価 440 円

作 者 早 船 ち よ

発行者 小 宮 山 量 平

東京都新宿区若松町104

発行所 株式会社 理 論 社

電話東京 (203) 5791 <代>

振替口座 東京 9 5 7 3 6

ゆうべ あなたは、
ゆびが 疼くと泣いた

若い しなやかな

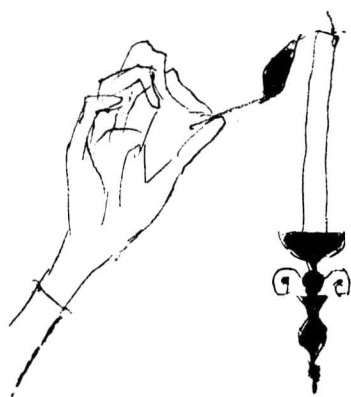
あなたのゆび

あなたの ゆびを

痛めたのは誰

——まえがきに代えて





もくじ

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
愛してる！	三人称でよぶ	赤いらせん階段	ジュンでなければ、できないしごと？	リス・野生のリス	脱出したい	きみは耳に、マミ……	ペースをつくる	ZD推進	若いネズミも
111	101	91	81	60	44	32	24	17	5



11	下降階段	127
12	体温のなかへ	140
13	言っではならないこと	150
14	タンポポいろのクツシヨ	163
15	ハト便 No. 1	180
16	花花のよそおい	190
17	おせっかいな、別のわたし	207
18	教え子を戦場に送るな	216
19	病気見舞い	231
20	父と、その息子	238
21	去るものは……	255
	あとがき・『さくらさくら』と	
	『青い嵐』について	262



そうてい・カット
鈴木 義治



再繰工場の窓ぎわから、二部合唱が流れてくる。
OMシルク工場のひるやすみ、息のあった、さわやかなコーラスだ。

“ なんてほしくないのよ。
未成年者だから……だから
まだ、子どもだって。
おいら、セブンティーン
(あたしはナインティーンよ)
心も

1 若いネズミも

からだも。そして、しごと
も。負けやしないさ、「おとな」に”

このごろ流行しだした☆未成年の歌の、テン
ポのはやいリズムが、くりかえす。
「おいら、セブンティーン、ティーン……」
ジュンは、ライトブルーの作業衣に、おなじ色
のネッカチーフ。ゆっくりした足どりで、コーラ
スへ近づきながら、いっしょに、
(あたしは、ナインティーンよ)

と、歌いかける。高い、張りのあるソプラノ。
ジュンは、十九歳だ。

「あたしは、ナインティーン。

未成年だから！

だから、愛しちゃいけない、なんて。

手をふれても、キスしても、いけない、なんて、なんて、なんて。

丸刈りぼうず、黒いネクタイで

首しめろ、なんて。なんて、なんて。

……。

「ジュン！」

コーラスのタクトを、びたつと止めて、サエが走りよってきた。ジュンの肩を、らんぼうに、ゆすぶる。

「ジュン！ てば。かわいいそうに、あんたあ！」

「なにさ。なにが、かわいそう？」

「ふん、強がったって、だめ。あんた、また、配

転だっていうじゃない」

「配転？」

ジュンは、きつとなって眉をあげる。まつわりつくサエの手を、そつとはずして、コーラスのほうへ向き直る。

「ちがう。みんなも、そんなアホな話、信じないでしょう。サエの誤解ですよ、配転だなんて」

みんなは、だれひとりも、うなずこうとしない。ジュンは、つづける。

「しごと、いままでどおり、糸量検査よ、信田さんと、いっしょにね」

コーラスのひとりひとりは、身じろぎもせず、目くばせを交している。

「そうなのよ。増産のために、いままでのしごト場を、第二選別部へあけわたす必要が、でてきた——それで糸量検査は、地下室へもぐれて、そういつてきただけよ」

「地下室へもぐるか……フフ」

サエは、皮肉に笑ったが、ほかのみんなは、無

表情に、押しだまったままだ。

「信田さんのところへ、現業長がそういつてきたんだから、それはほんとうよ」

ジュンは、見えない相手——かぶさってくるもやもやした影のほうにもむかって説得しようとして、やっきになる。

前列にいるトモは、眉根をきつく寄せて、

——それ、ほんとうかな？ しごと場を地下へうつす……単純な目的からかな？ 増産のためという現業長のことばを、ジュン、あんたは、全面的に信じているの？

そう問い返してくる。

——ジュン、あんたは、ここ二カ年にわたって、やりすぎてたんだよ。二カ年がんばっても教壇復帰できないような、野田・目加田両先生の公守る会々を、職場にひろげようとしたことじたい、ずれてたんだ。

——そのうえ、学習のサークルをつくろうとしてたり……人事でマークされるようなことばかり

するんだもの。

——だから、機械修理部からひきはなされて、別棟の糸量検査部へ配転された……そのところで、もう少しかしこくなって、おとなしくしてればよかったんだ。それを、あんたときたら、十九歳にもなって……。

トモは、口にしたしていなかったが、その気持は、ジュンにもびんびん、伝わってくる。いままで、何度か「はみだしちゃ、だめよ」と忠告されていたし、それはそのとおりだったかもしれないのだ。

コーラスのひとりひとりの顔に、同情と憐れみの複雑な表情がうごくのを、ジュンは見のがさない。

しゅんとなつて、地下室へ向かっていこうとするジュンを、青婦部長のサユリが、つかつかと追ってきた。肩をだきかえるようにして、早口でささやいた。

「二年後は、……だもの。ジュン、あんた、この

工場をやめたほうがいいんじゃない」

ジュンは、きらりと目を光らせて、サユリを見かえた。

「よく聞こえない。七十年安保？　だと、なぜ、あたしが」

サユリは、顔をしかめて、吐きだすようにいった。

「やめな、そのほうがいい、あんたのためにもね」
ジュンは、びっくりしたときの大きな目を、まじまじと、見ひらいて、二十一歳のサユリを見つめる。

「止めさせたがっているのに、辛くされて、がんばってることないじゃなか。あんた、この三月には、定時制卒業だろ」

ジュンは、首をふった。

「授業にでられないことが多かったんです……おそ番へまわされて、終業がおそくなったでしょ、だもんで」

「そのことなら、ジュン。福岡じいさんから人事

課へ申し入れて、早番のしごとへ廻してもらいうにすればよかったのに……」

「ええ、でも……」

「組合から申し入れることだってできたんだよ」
「そうでした。しかし……」

ジュンは、高校教育なんて、わたしには無意味になったんだ——ということを、いわなかった。それをいえば、学習サークル公屋根裏の大学で文句をつけられそうで、用心したほうがいい気がしたのだ。

「学校へも、ろくすっぽ行かしてくれない工場に
なんか、義理だてすることはないよ」

と、サユリはいった。

「あたしへの気がねなら、なおさらのことよ、人手不足のときだもの、いい職場を見つけて、じぶんの身がたつように考えな」

ジュンが、鋳物職人の娘なら、サユリもおなじキューボラの街、金吹町生えぬきである。ジュンは、サユリの口ききとせわで、四年まえの中卒後、

この工場へ就職し、いままで働いてきたのであった。

「サユリさん！ 青婦部長さん」

ジュンは、いたずらっ子らしく微笑する。

「それ、組合でそういう考えなの？」

「とんでもない、あたしの個人的な意見よ」

サユリは、気まずい目を、そらす。

サエがすりよってきて、熱っぽく、口説く。

「やめな、こんな職場。はやいとこ、高校のめんじょうをもらっちゃってさ。出世コースを行ったほうがかしこいよ」

「いまさら。……ばかなことを」

「世の中が、そういうふうに傾斜してきたんだから、しょうがないよ」

「そんなら」

ジュンは、サユリへ目をむける。

「あたいが、ずれたんじゃないわ。そういう世の中のほうが、おかしくずれたんだ」

「……………」

サエが、耳のそば近く、酸っぱい息を吹きかけ、「ねえ…公守る会」の活動が心配なら、それならジュンがやめても、あたいたちで……」

なだめようと、肩をなでさするのだった。

「できるの？ そういうこと」

サユリがうなずいて、ことばをそえた。

「むずかしい状況になってきたけどね、公守る会」の運動をつぶしては、野田先生、目加田先生にすまない。つなげていくよ、あたしたちで」

あたしたちで——というとき、サユリとサエは、コーラスのなかまをふりむいて、目くばせをした。コーラスのみんなは、それぞれが、ジュンにうなずいてみせる。

——やめさせられることないよ、がんばれ。

——あたしがついてる。

そういつてるようにも、サユリとサエのことほどおりにもとれる。ひとりひとり、それぞれの感情をこめた目ざし……他人でない、身うちのまなざしがこたえてきた。

「ありがとう、サエ」

ジュンは、コーラスのなかまへも、うなずきかえしていった。

「ありがとう、その気持で、ジュンを守ってちょうだい。ジュンが、この職場をやめなくてもすむように」

ジュンは、ばいばいと手をふって、新しいしごと場の地下室へ向かって、歩きだす。

後ろから、サエが、鋭く、叫んだ。

「強情っぱり、あとで泣くなよ、ジュン！」

「よせやい、丸刈りなんて

へいたいとか、ぼうず

でなきゃ、少年院みたいだよ……ブルブル

おっ、レ・ミゼラブル

レ・ミゼラブル！」

二部合唱が、らんぼうな調子にかわって、ジュンの背なかへ、たたきつけてきた。サユリが、追

いかけてきて、ジュンの手をつかんだ。

「ひとりで、勇ましくならなくてくれよ、ね。組合は、むずかしい状態におちこんでいるんだから……とくに」

サユリが、次にいおうとしていることは、いわせてはならないのだった。ジュンは、きつい口調で、撥ねかえすようにいった。

「イミが、よくわかりません」

「合理化がきつくなるけど……組合は、工場のそのやりかたに、歩調をあわせていくしかない……サークルなんかで、合理化を批判する学習なんかを……」

「……………」

ジュンは、ぶいと顔をそむける。聞こえないふりである。サユリは、苦笑した。

「センイ……とくに、シルク業界は、きつくなってきた。国際競争にうち勝っていくためには、生産性向上をはかっていかねばならない……それで、組合としては労働条件向上のために合理化に

も積極的に取り組む活動方針をきめた……」

そのとき、ポロン・コロシ・ポロン……と、作業五分まえのオルゴールの音楽が流れてきた。このオルゴールは、取っかかりの姿勢をつくるためのサイン……合理化とともに、このごろ始められたのである。

「わたしが心配するのは、ね。ジュンが、いままでどおりの活動をしていても、ハネっ返りと見られる状況ができている……そこそこね。ジュンだって、子どもじゃないんだから、わかっていると思うけど……」

「……………」

「組合を守っていくために、腹がたっても、がまんしなきゃいけない場合がでてくる。そのとき、強情っぱりされちゃ困るってことなの。そこをわかってくれれば、問題はないのよ……じゃ、おだいに」

ジュンは階段の降りくちに立ちどまって、地下室のしごと場をのぞきこむ。

くらがり。茫と白く、階段の踏み石が、らせん状に輪をえがいて、降りつく先はみえない。

ジュンは、ひとあし、ひとあし、くらがりの底、地下室へおりていきながら、足さきから背骨へかけて、ぞくんと不気味な下降感覚が走るのをおぼえる。

——OMシルクに、こんなでっかい陥し穴があったなんて、知らなかった……。聞いたこともなかったわ。

目さきがかげり、踏み石がゆれて見える。

ジュンは、錆びて、ざらざらした金属の手すりに、しっかりとつかまって、底なしの穴へ降りていくのだった。

——あなたは、いままでどおりとしても、状況が、ずるずると傾斜しているんだからね……と、あのひとも、いった。

——エスカレーション……地に足をつけている

つもりでも、自動階段は、人間の意志を問わず、無限に下降しつづけるのです。

それは組合の青年婦人部主催の〈新春の集い〉に講師としてきた、本部オルグ、三田タマキ女史のことばだった。彼女は、「女性と平和」について話したが、みごとに盛りあがった胸を張って、びんびん響く声で、ジュンら、センイ労働者に迫るのだった。

——センイ工業は、平和とともに栄えます。われわれは、戦争のエスカレーターに、のつては、いけない。

くるり、くるり、手すりをめぐって、すんと、コンクリートの床に足がつく。

ジュンは、あらためて、きょうからの職場を眺めまわす。

だだっぴろい地階の中央に、事務用の小デスク二つと、木の椅子。糸目かけの秤台や、帳簿整理用のロッカーなども、もうはこびこまれている。

しゃがんで、見上げると、階段の上昇していく

方向は、天井もろとも、くらがり吞まれて見えない。足の行きつく床が、降りはじめるとき、あるのか、ないのか、見わけられなかったように。らせん階段の手すり——白くのたうつ蛇は、くらがりを手さぐりし、宙に浮いている。

——宙ぶらりんの階段の存在は、ジュン、あなたの置かれている場をおもわせますよ……ねえ。

ジュンは、耳もとで、三田タマキの声をきく気がした。

宙に浮く白い蛇に、人間の足さきがからみ、麻うら草履に、爪先のすりきれた紺足袋が階段をおりてくる。つぎのあたったデニムの作業ズボン。

よれよれの作業衣の胸に、丸い工員バッジ。

男は、ゆっくりと階段を降りてき、あと二、三段のところまで、「あ」と驚きの声のんで、まじまじと、ジュンのほうを見た。よほど、おどろいたのだらう。よろけそうになった上体を、あやうく手すりできさえた。

「ジュン！」

鳥のように、ぎゃアとしか聞こえない奇声である。

——信田さんだ——と思いつくまでに、ジュンにも、ちょっとのまがあった。ジュンは、目を見ひらいたまま、化石のようにからだをかたくしていた。

やせて骨ばった男——検査係の信田は、かけおりにくるなり、ジュンの肩に手をおいて、こんどは、こみあげてくる笑いに身をもんだ。ア、ア、ア……と、言語障害の啞の笑いを笑った。

「信田さんったら、まあ！　びっくりさせるわね」
ジュンも、声をたてて笑った。

信田は、壁ぎわへいって、スイッチを押した。蛍光灯が、またたく。地下室には、水底の世界のように、青い光が、ひたひたとひろがる。

「電灯もつけないくらがり、何をしていた……」
信田は、手まねでそういい、じぶんとジュンの二重のおどろきを、おかしがるのだった。

——ジジジジジジ、ジジ……。とつぜん、机

の上のブザーが鳴りひびいた。信田は、事務机へ手をのぼした。「オー・ケー」のサインのボタンを押す。——と同時に、天井板が、ずずず……と重たく、横にすべり、ぱくっと、空間が、外光で四角く割れた。

ジュンが、目を丸くしている鼻さきへ、ロープでつった大きなハンモックが、ゆらゆら、おりてくる。ハンモックには、キラキラ白光りする製品の糸束が、いっぱい、はいっている。

信田は、ハンモックのかぎをロープからはずし、べつの空のハンモックにつけかえて、とんとんと強く、ロープをひく。そのあいずで、ロープは、するすると、つりあがる。

ジジジ……と、ブザーの音。天井板が、ずずず……と、横からすべってきて、びたり、空間は閉ざされている。

「へえ、おかしいな仕掛けね」と、ジュン。

「むかしね、こうして地下室で、しごとしていたことがあるのですよ。むかし、長い、ながい戦争

がつづいていたところに……」

信田は、手まねと表情でそういい、へやの隅のロッカーから、ボロ毛布をとってきた。それで膝をおおうと、ポケットからパイプをとりだしてくわえた。

——きょうのひるまえまでは、離れ島のような隔離された検査室。午後からは地下の穴ぐら。しかし、どこにいたって、しごと場はしごと場さ。

信田は、ゆうゆうと、パイプをくゆらしはじめた。

「ジュン。地下室は、春も夏も冷えるからね、こんど公休にかえったら、家から毛布をもつておいで」

「あら、あたいななか」

「だめだめ、若いネズミだって、神経痛かリュウマチにかかっちゃう」

「ネズミ？」

「地下室のネズミでも、つてことさ」

「あはははは、あたいがネズミ」

あなぐらのネズミにされたのがおかしかった。ネズミの神経痛なんて、もっと、おかしくてならない。

信田は、ついて笑った。きょうは、信田の健康が正常な日で、目ざしが明るく、やさしげだった。信田は、偏頭痛の持病をもっていて、三日にいちどは、激烈な痛みにおそわれるのである。

ふたりの笑い声は、がらんとしたコンクリート壁からはねかえって、ひびく。——わわわわわわわ！ 不気味に増幅された声、化け物の嘲笑だ。ジュンは、笑いやめた。

「ねえ、信田さん。なぜ、あなぐらを、しごと場にしたの」

「糸の景気がでたからね。生産量をふやすため……原料置場と選別場とを、ひとつずつふやしたからね。」

「ねえ、なぜ、景気がでたの」

「キヌを着るひとがふえたから……ぜいたくな、高級品のキヌの着物や、洋服地を」